

「この私」の唯一性に関する論理と経験

沖 永 宜 司

はじめに

直接経験とは論理を媒介しない経験だといわれる。しかしそうした経験を私たちが言葉によってとらえる手段は論理であり、ここから逃れることはできない。よって、そうした経験を「無媒介性」とか「純粹」経験と表現しても、その経験がどのようなものを捉えたことにはならない。そこで小論では、私たちと論理的媒介の「密接さ」に着目し、私たちに密接ですでに媒介がないと思われる認識の中に介在する「論理」を洗い出し、「経験」をそこにさえ組み入れられない何かとして性質づけたい。しかも論理を介して認識されるものは、こちら側のフィルターを通して現れるにもかかわらず、それと無関係に存在すると思われる。私たちは論理の内側から、当の論理そのものを見ることはできない

からである。この論理と実在との混同は、形而上学的問題の発生において顕著に見られる¹⁾。その例として「私」の問題を以下で検討していきたい。「私」は主体に最も密接であるゆえに、論理の介在はないと思われる典型例であるが、これが無条件的な実在として認識された際には、その存在に関する回答不能問いが生じる。その問いが「この私」の存在に関する問いとなる。

私たちは内省において「私」そのものを経験の中に見いだすことはできない。だが他方、「私」は概念上の虚構であるとする見解にも、首肯しかねるだろう。なぜなら、「私」なしでは思考や判断、主体的行為などがすべて不成立になるからである。これを延長すると、「私」なしでは私にとっての世界もすべて消滅する、という考えに至る。このレベルになると、「私」は自我一般の性質を超え、それなしでの世界が考えられないことから、この世界

における唯一存在という性質を持つてくる。これが「この私」レベルであり、それ自体は経験的に見いだせないにもかかわらず、論理的には存在に関する根源的な問いかけを呈示するに至る。そこで私たちは以下、「唯一のこの私」という謎の発生について、経験の側と論理の側とでそれぞれ検討した後、その解決可能性を検討する。それは一般に形而上学的な問いの発生とその消去の可能性につながり、この問いの解決のされ方が小論での課題になる。

一 経験がこの私を消去する根拠

経験の内部では「私」一般にさえ出会えない。これは客体化された「私」ではなく、客体化を遂行するが、それ自身は決して客体化されずに残る何かであることは、まず確認しておく必要がある。そしてこの性質の徹底化は、匿名性としての意識流や、純粹経験と呼ばれるものに行き着くこともしばしば指摘されており、その意味でデカルト的に「私」が「考える」という方向よりも、「考え」が先行してその結果、考えの基点として、「私」が要求されてくる、という方向に根源性が見いだされている。この方向に徹底する限り、「私」とは機能的な基点として設定された論理的な便宜性を司るものとなる。

では「この私」も機能的存在なのか。これは「私」と違って誰にでも生じ得る一般的な出来事ではなく、ここにおいてしか生じ得ない究極の唯一性を持つ。そしてこれは、どんな客観的差異を

も生み出さないことをその唯一性の根拠としている。⁽²⁾「この私」が機能的存在ではないことを示す。そして「この私」の有無によって客観的世界に差異は生み出されない一方、主観的にはその有無が世界の有無を左右させるところに、その不可解さは集中している。「この私」がいなくなるのであれば「この世界」もすべて消滅すると言うことも可能だからである。

こうした不可解さにおける「この私」の特殊性は、それがあらゆる概念的装置以前に、理由なく存在してしまった、という直観を成り立たせる。問題はそれが本当に無前提な直観であるか、である。そこでこの直観の成立について二つの側面から吟味したい。一つは、「私」はなぜ「この私」であり、別の場所、別の時代、もしくは別の生物種の誰かにならなかったのか、という成立構造である。ここでは私の客観的性質を持つものは無数の生物のどれでもよい、という客観的可能性の莫大さと、「私」は時空的に無限な宇宙の中で、たった一つここにしかない、という主観所持者の究極の被限定性と断絶がある。この客観性と主観性との断絶が不可解さの発生根拠になっている。ここには「この私」の客観性や必然性はどこにもなく、かつ主観としては唯一絶対性を集約している。

次に、存在しない可能性もあったのに存在してしまった、という仕方と問題にされる「この私」。自我が一般に生じてくる仕方、他者との関係からの同一主体の確立、もしくは自己意識の発

生などから説明可能である。しかし、なぜその任意の自我が「この私」になったかについての説明は、その中には含まれない。つまりこの意味で、「この私」はあらゆる因果関係や存在条件からは説明できない。

ではこれらの不可思議が本当に無前提に成立しているかを検討したい。まず第一の性質に関しては、そこで問題になる「この私」とは一切の客観的規定から外れていながら、他方それは私ならざる客観的世界の莫大さという外的状況との対比という矛盾を隠している。つまり、私が単独に考えられることが、「この私」の発生源である一方で、この単独性自体が「他」との対比による自己定立を必要とするのである。そしてこの自我以前の経験について、それが私であるか、私ではない誰かであるか、という問いは意味をなさない。「私」がなぜ「この私」という問いは、自分を区別する一般的な「私」枠の設定なしには生じ得ないからである。

だがそこで生じた「私」は、必ずしも「この特定の私」である必要はないのではないか、という問いは残る。これについては、もともと私は存在する限りは特定の誰かでなければならぬ、という回答が可能である。なぜなら「この特定の私」とは対外的、時空的な被限定性によって生じ、「私」それ自体の内では生じないからである。つまり、「私」が何らかの形において存在する」とことを認める限り、私がどの時代、どの場所、どの生物として生ま

れても、そこに問題はない。私がこの客観的性質を備えたことは無限の可能性の中の一つという無限の任意性を、一つの必然として見ようとする場合に問題化されるだけである。このように、まず自我一般について見るならば、「私」枠が論理的構築物と見なされる場合、「私」の独立性はアブリアオリではなくなる。「私」枠は自我の側に特有のものと思われながらすでに他を前提としているからである。そして、「この私」に関しても、「枠」のない「この私」というのは矛盾ゆえに不成立となる。

だがそれでも、匿名的な経験しかない状態から、「この私」という宇宙の中で唯一特異なものが生じた不可思議は直観として残る部分がある。それは「この私」の「この」性は経験一般の中にはどこにも見いだされず、この無前提の直観は何も無い所から特定の「この私」が生じたという方向を考えさせてしまうからである。つまりそこに、「存在しなくてもよい私が存在してしまっただ」という問いが生じ得るからである。しかしこの問いの条件をさらに追究すれば、そこに「この私」の非存在が前提にされていることがわかる。それは「私」が「この私」であることの不思議が他者を条件とした構造と類似している。それではこの「他者」と同様、存在がその非存在を条件とすることに矛盾点は見いだされるだろうか。そのためには、存在がその「外部」を考えることにどこまで妥当性があるかを吟味しなければならない。「私」とその外部との区別の構造がないことは、「私」と他者とを区別

する「私」枠つまり差異を生じさせる論理枠の消去と同時である。しかしこの「論理を取り扱うこと」が存在問題の消失にまで及ぶのがさらに問われなければならないのである。

二 否定的事態は存在しないか

ここで論理と存在との関係が問題になる。それは「この私」の問題化については、その「非存在」がまず設定されることが本質的な操作か、という問いになる。この「非存在」とは存在に対する「否定的事態」である。つまり存在に対する「否定的事態」が成立しないことの本質的な妥当性を検討することが必要となる。そこでここでは二つの相反する側面からそれを吟味したい。一つは、論理空間内には「否定的事態」というものは見いだせず、否定とは常に論理空間の外部に人為的「操作」を加えることで初めて設定されるものであること。二つ目は、それでも世界が存在することが「神秘」であること。

第一の側面の検討において示唆的なのが、ウィトゲンシュタインの『論考』における、「否定命題の論理的領域は、否定される命題の論理的領域の外側にあるものと記述される。」(5.064)という言葉である。これは事実そのままの姿の内には、否定に相当する事実を認めないということである。したがって現実には、否定される事実に対する否定や、否定では「ない」という意味での肯定は、写像される事実の内にはなく、同一の事態に対する写像の

「仕方」によって生み出される。この事実と写像の「仕方」との区別の背後には、論理語が対象には依存しておらず、そこから独立した「操作」にはかならないという思想がある。つまり、純粋な論理語には実在性がなく、したがって「操作」の反復のみによって生じる事態は非実在的だという思想である。

しかしこの「否定」を、純粋な「操作」と見なす場合、「否定」の第二の側面が問題化する。つまり存在の「神秘」はなぜ登場するか、という問題である。先取りすれば、この「神秘」が、事態一般に対する否定操作とは異なった仕方では生じているなら、それは第一の側面とは別の特有の事態を意味する。つまりこの存在の「神秘」は、存在が一般に問題化するための条件なしでの「神秘」ということになる。さて、「否定的事態」の第二の側面と論理的操作との関係については、まず「論理は『いかに』よりも前にあるが、『何が』よりも前ではない。」(5.552)という言葉が示唆的である。否定を事態の外部に設定するのは「論理」であり、これは「いかに」を成り立たせる形式となる。だが私たちはそれ以前に、「いかなる」経験が判別されないが、それが無いと経験が経験として生じてこないものを考えなくてはならない。それがここでの「何が」にあたる。したがってそこには、論理的操作が条件となる「否定」さえ成立せず、したがってこの「何が」は厳密にはその非存在との対置という操作を含み得ない。だが「存在」が問題化する場合に、「なぜ非存在」ではないのかという「論理」

がその前提になるとするなら、右記の存在の「神秘」はこの前提を持たない領域に出ざるを得ない。

これを踏まえ、さらに『論考』の独我論における、「あれは存在するが、これは存在しない、と言うことはできない。」(912)というテーゼを検討してみたい。『論考』においては、存在は有意味性の条件であり、これを踏まえて初めて命題の真偽が問われる。だが私たちは事態一般について、それが存在しないと考えることは容易であり、その点で存在の否定を「言うことができない」という主張は一見不自然に思われる。だが次のように考えることはできる。事態Aの否定を言ったとき、その瞬間にそれは「事態Aの否定」という肯定的事態に転換し、その外部については語れない。さらにこれを否定しても、「事態Aの否定の否定」となり、以下同様、何かへの「否定」を全体として肯定化する枠が必ずその一つ外側にでき、否定はその外に出ることはできない構造が続く。

この反復は、意味論的独我論において、意味論的に閉じられた「私の世界」の内部に限れば、その存在の肯定も否定もないことに相当する。世界存在の問題化がその世界の外に出ることを条件とし、かつ有意味性の条件が存在であるならば、「世界が存在しない」という命題が有意味であるためには、即その命題を含む世界が新たな存在となるほかはない。世界を否定する視点は即、「私の世界」の中に入ってしまう。これを言い換えれば、「私の世

界の非存在」は「私の世界の存在」を問う条件だが、前者は言明されたたん、存在する「私の世界」に入ってしまうため、この世界の外部についてはどこまでも問い得ないこととなる。

このように考えると、存在という「神秘」を謎として語ることはできない。なぜなら謎とは、そこへの問いが有意味に答えられる可能性を条件とするからである。この条件から外れる限りにおいて、「私の存在」の謎は、それ自身において瓦解してしまっている。この限りで謎は存在せず、「存在」論は語り得ない。したがってそれでも存在の「神秘」が成り立つとすれば、それは語り得る問いが成立しない領域における「謎」になる。つまり「存在」とは「何」が問題なのか、と言うことはできないが、それゆえに意味以前の次元において「神秘」を照らし出すことである。

さて、「私の世界」の非存在が考えられない状態は、「この私の非存在を考える状態より根源的であり得るのかについてさらに考察したい。この前者の状態の語り得ない性質は、私たちの論理空間を支える形式は、その空間とは異なった外部の別の空間からしか見られ得ないことに類似している。しかもその空間の「非存在」の仮定の場合は経験と無縁な純粋な「操作」によって、常に形式的にその空間の外部に出ることが要求される。ここで着目すべきなのは、この「操作」が経験的規則に拘束されないにもかかわらず、私たちが思考する限り避けることができない根源性を持つ

ち、それ故に形而上学的問題をも生じさせる性質である。例えば「私」は無前提ではなく、そうした根源性によって生じる実在の一つである。この枠は特定の人格をそれ以外から区別する機能的な役割が規定されるために必要である。しかし、それは自らを要求する役割を超えて、なぜ「この私」はその特定の枠内にいるのか、そもそも「この私」はなぜ存在するか、という問いを生じさせる。これは本来の機能的役割を超えた問題提起である。この問題は存在と非存在との区別、またどこまで存在を広げても、次の段階として「存在の外」という「一歩先」が生じる構造に起因している。この構造は、「存在の外」をも有意義性の領域に取り入れ、真に「語り得ない」領域を私たちに語らせてしまう。

では、この「一歩先」構造が終焉することはあるのか。「私」枠に基づく操作が、「私の非存在」を問題化し続けるのであれば、最初から「私」枠のないことが、「私」の「非存在」を消去する方法となる。「非存在」を作るのをやめるのではなく、「非存在」の根拠を最初から消去するのである。だとすればこの「非存在」が「ない」状態は、「一歩先」構造が続く状態からは理解できない。そしてその状態においては、論理空間一般で示され得る「私」が消滅している、という大きな特徴がある。「私」の消滅は、あるがままの世界を観想する状態にも相当する。その時否定に相当する事柄は論理空間の中には見いだされず、この空間自体が対象化されることもない。反対に否定「操作」の条件は否定される

事態の外部に出ることであり、このときその外部の点は「私」の視線として出現してくる。すると否定「操作」がない場合には、否定される世界を見る「私」、さらに世界を見る唯一の「この私」さえないことが要求される⁶⁾。論理空間は一般に、それ自体を「否定」することは可能である。それに対して、無「私」空間では、その空間の否定を語ることもできないことに特徴がある⁷⁾。

三 「この私」の非存在が考えられないとはどのようなことか

「一歩先」構造の消滅、「操作」の生じない状態、無「私」空間は、「この私」から「理解」することはできない。しかし、何かのアナロジーでそこに接近できないだろうか。まず「私の非存在」を設定する「操作」が生じない事態は、次の二通りの場合において考えられる。それは第一にこの問いを問う「この私」が存在しない場合(①)であり、第二は問いを遂行する「私」という「論理的概念」が消去される場合(②)である。「この私」から①の場合へたどり着くには自分自身が存在していない状態を想像する困難、②へは自我主体の論理的枠組みが取り払われた状態を想像する必要性がある。前者は存在上の断絶だが、後者は存在を前提にした上での論理的な枠に関する断絶と見なされる。しかしここでの試みは、①における存在の消去と、②の論理枠の消去との根源的な地平における一致を見ることである。つまり①の存在の

断絶と②の論理枠の断絶とは究極的に融合する。現に、①において「この私」の非存在とは、まず「この私の無」として、暗黒という存在者として浮かび上がる。それは「この私」の存在が論理枠内に確保され、「無」はこの枠の外の存在者として規定されることによる。しかもこの時、「無」が存在の側からの論理によって浮上することは忘れ去られている。つまりこの状況を越えて①の方向から「この私」が非存在でさえ「ない」状況へ到達するには、根本にこの論理枠の乗り越えが必要なのである。

そこで次に①の断絶を、②の「この私」の存在を前提として、「私」枠の有無を消去することから見直してみたい。これは、「この私」が存在する状態から出発しながら、「私」枠の不成立により、その状態自体が自ら瓦解する事態をまねき、この事態が「この私」の非存在が考えられない状態に融合するという形をとる。

つまり①は存在の壁をあからさまに超えてしまう所で不自然さがあつたが、②は自然な形でいつの間にか存在の壁を超えてしまう。この乗り越えは、②の当初の「私の枠だけがない状態」と、②の行き着く先としての「私の非存在が無意味化された」状態との比較から明らかになる。この無意味化の状況は、非存在としては直観されない。むしろ存在の地平の中で、ある論理的な条件によって「非存在」という概念が無効になっている状況として捉えられる。その意味では、「枠だけがない状態」から「非存在の無意味化」への移行では、存在は継続していると感じられる。①の方向

は最初から存在に対する非存在という隔てなのに対して、②の方向は論理枠とその消去との隔てであつて、隔ての質が異なるという直観があるからである。そして、「この私の非存在が無意味化された」ことは、存在非存在の隔ての乗り越えとも、論理枠とその消去との隔ての乗り越えとも対立していない。その意味で、①の当初における「この私が存在しないこと」と、②の当初における「私枠がないこと」とは、両者の終局としての、「この私の非存在が無意味化された」地平で重なる。

つまり①と②の手続きは、「なぜ私は存在してしまつたか」という問いの前提自体が自ら瓦解する彼方において一致を見せることになる。言い換えれば①の方向は、存在の断絶という不自然さがありながら、「非存在の無意味化」という到達点から振り返ると、その断絶はすでに意味がなくなっているというもの、②の方向は、存在は継続しており自然だが、「非存在の無意味化」という到達点への過程において存在ということがいつのまにかぬぎ去られ問題化しなくなっているというものである。そしてどちらの方向でも、到達点は私たちの現状としての論理空間の中に見いだすことはできず、その意味で私たちの側の思考からかけ離れているのである。

四 「この私」の非存在と形而上学

前節①②の到達点が私たちの論理空間から外れていることは、

ここでは「わからない」ことが成立していないこともある。一般に「わからない」ことは知られるべき事柄の枠組みが設定された上で、その中に情報が与えられていないことよって成立するのに対して、これらの地点ではそうした枠組みさえないゆえに、知られるべき情報ということがすでに無意味だからである。

ここまでの議論において、「わからない」という事態は三種類に区分された。一つは同一論理空間内で有意義性の枠内において「わからない」ことが成り立つもの。二つ目は論理空間同士の間としての形式の異なるように、何が異なるのか「わからない」こと。第三は、「この私」の非存在が考えられない空間におけるように、存在理由について「わからない」ことが成立しないもの。問題なのは、なぜ「わからない」ことが成立しない状態から、「わからない」状態が生じたのか、ということである。例えば、時間の形式の中で、過去に遡る、もしくは未来へと進んでゆく操作を無限に繰り返せば、そこで「無限の過去」や「無限の未来」が現れ、するとそれらの果てとその向こう側が問題化するに至る。そこは非存在の領域として現れる。無限の空間の場合も同様である。しかし、「この私」の非存在が成立しない空間においては、操作の限界において現れる非存在領域はその出現条件の方がすでに奪われている。この、問いの条件の未成立という観点からすると、「果ての向こう」のような形而上学的問題についても、その答えが「わからない」のではなく、問い自体の根拠が何かが

問題となる。この根拠が未成立の空間を、私たちにおける「果ての向こう」が問われ続ける空間から理解しようとする際の困難は、異なる論理空間同士が全体としてどのように異なるか、互いに他からは「わからない」ことに等しい。

これは存在の側から非存在を問題にする空間から、存在非存在という区別が未成立もしくはすでに成立していない空間については理解不可能であることと同じである。この意味で第二の「わからない」と第三のそれとは共通する。操作の反復の限界と「その先」の問題化は、反復される空間ではない領域として、「その先」が反復空間の外側に設定されることによって生じた。同様に非存在の問題化も、存在という枠の外側に非存在が設定されることによる。ただ、ある対象をそれ以外のものとの区別によって定立させる私たちの思考は、この反復空間を生み出す操作から逃れることはできない。

このような第二の意味での、知と不知との区別を無意味化させる「わからない」が、第三の意味における存在と非存在との区別の無意味化とも関連することは、特殊な時代と場所だけではなく、思想上の随所に見られる。例えばシレジウスの「神は始まりをまったく知らない」（詩集一八〇）という言葉があるが、これが第一の意味での「わからない」だとすれば、無限に対する神の有限性の言明でしかない。しかし続く「神はまだ一度も存在していない」にもかかわらず「この世が終つてからも存続する」（詩集

一八〇⁽⁸⁾という、存在についての全く矛盾した表現は、存在非存在の区別という形式上の前提が、神の側では成り立っていないことを示している。二分法的な形式の消去は、知と不知だけではなく、存在と非存在という根源的な区別にまで及んでいる。存在とその始まり以前が問題になるのは、あくまでこちら側の形式から絶対者を捉えた際に生ずる事柄だからである。無論ここでは、「わからない」がすでに否定的な状態でさえない。また、不知が成立する場合には、それを知らず区別する形式と、この区別を行う主体とがあり、そのとき不知の領域は消極的ではない。しかし不知さえ成立しない場合には、この区分形式がただけではなく、形式を司る主体の有無を区別することに既に意味がなくなる。この場合、不知の領域は向こう側に広がることはなく、しかも主体を否定する意味での消極性がすでにありえない。これが純粹な「経験」の性質であり、そこで経験の全体は積極性に転ずる。シレジウスにおいて、神の側における存在とはそうした性質になる。

おわりに

この小論では、「私」という特異な点、そして独我論をも可能にさせるような「この私」の出現が、ある論理的条件の上に生じているものであり、するとその条件の消去が「私」や「この私」問題の解決にも結びつくことを見てきた。しかしその解決とは問いに對する答えが与えられるという形式はとらない。これだと

「私」や「この私」を成立させる論理的条件は変化せず、すると仮にそこで「私」や「この私」が消去された場合、それは「私の無」という消極的な解決にしかならないからである。しかも問いと答えとが意味に對応するには、それらが一貫して同じ論理的形式に則ることが条件なのである。むしろ「私」や「この私」の論理的条件の消去とは、逆に「私の無」さえ成立しないことで、それらに新たな積極の意味を与えるものであると私たちは考える。そしてこれが「私」や「この私」が消極的に問題化する論理空間をその全体として変化させることであり、純粹化された「経験」の特徴となつてゆくものでもある。

「論理」においては、対象を確定的な存在者とする必要があり、またこの存在者は無時間的に考えられる。「この私」もそうした無時間的な特異点である。しかしこの確定性の形式が未成立の領域へと進むと、この存在者はまったく別の土台から創りかえられる。その場合、存在者が確定的かそうではないか、という判別までが消滅し、それがこの存在者を規定する論理的な形式の消去と重なってくる。そしてこれが、同じ論理空間内の具体物が変化することではなく、論理空間が全体として変化する際に生ずる特徴的な出来事なのである。しかしあくまで存在者の側に目を向けている視線からすれば、この論理空間の全体としての変化がどのようなことを理解することはできない。しかし逆にこの理解できないことが、この変化を直観的につかむ方法ともなるのである。

この存在者を「この私」とすれば、それを形成させる論理空間が全体として変化した場合には、「この私」は独我論的な点にさえなり得ない。そしてこの状態を、無時間的、確定的に「この私」が考えられている空間から理解することはできない。さらに「経験」とは、この無時間性、確定性の不成立を純粹化させた状態に相当する。つまり「経験」とは、この論理空間の全体としての変化、そして「この私」の不成立という角度から捉え直されるべきなのである。

(1) 例えば時間や空間の無限、もしくは因果的系列の起源などでは、この論理が系列を出現させるフィルターになる。そしてこのフィルターを通して現れたものが実在の真の姿だと思われる所に問題が生じている。小論では、この現れを実在そのものではなく、論理による視角に現れ出したものと見なし、フィルターへの反省をその問題解決への導きの糸として話を進めた。

(2) 「客観的自己」(Thomas Nagel)、「意識の超難問」(Tim S. Roberts) など、「この私」と同様の性質を持つものはさまざまに考えられてきた。これらの有無によつては客観的差異がまったく生み出されない点でそれらの議論は共通している。ただ、ネーゲルの「客観的自己」は、「私」の客観的性質を極限まで剥奪してゆくことで、もはや「私」ともいえない地点に至るという特色を持っている。これは小論での、「この私の非存在が考えられない」状態に近い。(3) これを素直にとれば、もし否定的状態設定の根拠が人為的であり、そのことが存在に関してもあてはまるのであれば、存在の「神秘」は生じないということにもなる。なぜなら存在が神秘化するの

在への「否定」という事態に、人為性を離れた「実在性」が備わらなければならないからである。

(4) その意味で「否定は名ではなく、真理領域を反転させる操作」(野矢茂樹、「論理哲学論考」を読む 九九頁) だという指摘もある。同書では、否定を表す「ではない」だけではなく、「かつ」「または」といった論理語も、対象の中には見いだせないと考えられている。

(5) この「操作」とは対照的なのが「関数」であり、これは基底、定義域に拘束される。つまり世界の事態に拘束され、この事態が異なることによつて関数の方も異なることになる。つまり関数は経験依存的で、純粹な「操作」は非依存的ということになる。関数の方が実在論的なのである。

(6) 「私」のない世界とは死んだ世界なのではなく、むしろ個別主体としての「私」と世界とを隔てる枠がなくなった状態である。すると反対に、死んだ世界が成立するには、つねにそれ自体を観察する「生きた」視点が、世界とは別に要求されることになる。つまり死んだ世界とは、無「私」の世界ではないゆえに生じる事柄なのである。これは逆に、無「私」の世界は死に得ない、もしくは何らかの積極的な姿でしかありえないことを意味する。

(7) 無論、「自らの非存在を考えられない」空間は、この空間を何かとして考へることが成立せず。その点で、「自らの非存在を考へ得る」空間とは決定的に異なる。

(8) 植田重雄・加藤智見訳「シレジウス瞑想詩集」上二二八頁(第三章一八〇、一八一) 岩波書店、一九九二年。

(9) 例えば「中論」において、四句分別が否定の組み合わせによつて勝義を示そうとする場合、それは勝義が「知」「不知」の区別が可能な所で、「不知」と見なされるのではなく、それを捉える形式がな

いことを示すものとして理解できる。四句分別は「A、不A、Aかつ不A、非Aかつ非不A」の四通りの句から成る。つまりそれぞれ肯定、否定、肯定かつ否定、肯定ではなくかつ否定でもない、という形をとる。それはA（例えば空）の本質が単に矛盾によって示されることを述べているだけではなく、特に第四句では、「A」「不A」という私たちにとって身近な二項対立にもあてはまらないことを示している。つまりAは「わからない」のではなく、私たちの論理空間を前提とした「わかる」「わからない」という区分にもあてはまらないのである。この「あてはまらない」ことは、単に消極的な意味ではなく、単に「わからない」ことをも消去して肯定に転じせしめる一つの積極性を示している。

（おきなが・たかし、哲学・宗教学、帝京大学助教授）